

避難所の運営と避難者の自治

宮城県亶理郡;山元町立山下中学校

1 地震当日の様子

○3月11日(金)地震があった2:46分は、卒業式も終わり生徒全員が下校して2時間以上たっていた。大きく長い地震の揺れがおさまってあと、いつものようにテレビをつけ津波が来ることを知った。本校は台地にあるため津波の心配はなかった。

教訓; 正確な情報を得て行動することが大切。

対策; 現在は長岡市の支援でFMりんごラジオができて地域の情報が電波で流れる。生徒には支援品の携帯ラジオを渡してあり登下校中でも情報を得ることはできる。防災無線がうまく機能しなかったので山元町として対策が必要である。

○余震が続く中、30分後には停電した。照明、電話暖房、印刷機、コピー、FAXなど機能が失われた。夕方になってロウソクなどを理科室から借りてきた。夜になって、役場職員がエンジン発電機を2台調達してきてセットした。

教訓; 職員室に懐中電灯はあるが、乾電池の在庫が少なかった。ロウソクは小さいものしかなかった。ラジカセはあったがラジオを聞く余裕がなく情報どころか避難者の対応に追われた。

対策; ランタンやロウソクなど停電に備えた照明を備蓄する必要がある。また、発電機がきてからは投光器だけでなく蛍光灯スタンドがあると便利だとわかった。

○夕方から避難民が多数、中学校にやってきた。天井落下物で体育館が使えず、各教室や多目的ホールなどを避難者に使ってもらった。寝具の毛布が50枚しかなく、小学校と合わせても100枚で絶対数が不足した。柔道場の畳を運んだり教室のカーテンを活用したりした。何とか夕食を調達するため準備を進めた。職員が避難者から分かるように「蛍光ジャンパー山中」を着用した。受付は体の不自由な人など様々な人々で部屋をどう割り振るか寝具をどうするかで混乱し対応が大変だった。



写真「多目的ホールの避難者」

教訓; 避難所として全員に給食用の碗に四分の一程度の粥をふるまったが、3日間は自力で食糧も確保しなければならない。これも教職員では難しく役場職員スタッフが地域を回って米を集めたからできたことだった。ジャンパーは、ボランティアに地域に出るため作っていたが大変よかった。

被災者を地区ごとに分けて部屋割りした方が後で考えると都合が良かった。



写真「夜間のスタッフ」

課題; 今後のために毛布300枚が最近配備されたがアルファ米やカンパン、水など備蓄する必要がある。

○断水によって水洗トイレが使えずプールから水くみをした。大便を詰ませ掃除するのがたいへんであった。仮設トイレが来たのは12日であった。

教訓および対策; 水くみ用バケツは各教室の清掃用具を活用した。災害に備えて、避難所は仮設トイレが設置できるための用意が必要である。特に雨をさける屋根と夜間の照明がないと仮設トイレは汚れて大変である。

○深夜まで、職員は交代で避難所業務に対応した。尋ね人への対応、ずぶ濡れでやってくる被災者のお世話、体調不良者の救急車手配、発電機へのガソリン給油、夜間の巡回警備などを行った。

教訓; 掲示板を設置してメモを貼り尋ね人の対応をした。消防署が近いので助かったが電話が使えない中で緊急車両を手配する方法が必要である。ずぶ濡れの人の着替えがなく職員の体操着でまかされた。発電用ガソリンの確保は、役場職員があたったが教職員では難しかった。



写真「探し人のコーナーで探す人びと」

2 12日から16日に電気がくるまで

○夜が明けるとほっとしたが、すぐにトイレの水の給水、食事の用意、土足で生活していたので階段などの掃き掃除、各種の問い合わせや苦情、各教室への連絡など、職員の手が足りないほどであった。

対策；部屋ごとに連絡員を決めてもらい、「連絡員会議」を18：30に定例化した。毎日1時間以上諸連絡や話し合いに時間がかかった。内容＝町から、学校から、健康指導、課題の話し合い、校長からの順で実施した。

助言＝「一人一人がルールを守って助け合いの気持ちを持つこと。自分たちのことは自分でやり、歩み寄りが集団生活には必要であること。」を避難者に語りかけた。

成果＝掃き掃除、夜間警備は自分たちでできるようになる。その後、起床時間、消灯時間喫煙場所、飲酒の禁止、ペットの持ち込み、新聞の配布、トイレの水くみ、衛生管理、物資の整理や搬入係が決まった。



写真「避難者による係分担の会議」

○食事係、受付係、トイレ衛生係、物資係、警備係など職員で分担を決める。ボランティアを募り物資の搬入や管理そして配布が少しずつ始まった。

教訓；事務職員は年度末の事務処理が有り、物資係は変更した。物資搬入の人足、提供の段取りなどが重要である。毛布は15日にたくさん届き16日に配布できた。食材は栄養士と調理員がいたので助かった。かまぼこ、萩の月、米、野菜、りんご、冷凍食品などの提供があった。ガソリンがあれば多数の冷凍食品を搬入し食材にすることができたのに残念であった。3日間は自力で食材の確保に走らなければいけなかった。自衛隊の炊き出しや給水車は14日に始まった。



写真「配食の様子」

○3月16日18：00電気がきた。電化生活に慣れている私たちには大変嬉しかった。照明や暖房が使えるようになり、電気ポットなどお湯の提供も実現した。マスクや衣類、靴を配布したのも16日以降であった。長靴は被災地に入るための必需品で抽選会をしたほどであった。

教訓；パソコン、ブルーヒーター、集中暖房が使えるようになったが、電気ポットは7～800Wあり1つのコンセントに2つが適切であった。支援物資は、公平に必要なものを被災者に配布するため工夫する必要がある。特に、衣類や靴などはサイズがあるため、準備が必要だった。

3 16日電気がきてから水がくる23日まで

○車上荒らしやガソリン泥棒対策で自警団が発足した。ペット同伴についても連絡会で話し合いをもった。また、新聞の配布も被災者自身で行うようになった。ケータイの充電やトイレはサンダルに履き替えることも16日の避難者の自治活動の話し合いで決められた。ゴミ燃やしボランティアもつものった。

教訓；避難者の中から進行係を選出し、リーダー的な役割を果たす人物を見いだすことが大切である。



写真「トイレのサンダル」

○3月18日には、朝のラジオ体操を始めた。呼びかけたところ高齢者を中心に数十人が集まり、毎日の定例となった。

また、21日音楽教師によるオーボエコンサートがありその後避難者の三味線演奏など音楽による心の癒しの機会がもたれた。

教訓；ラジオ体操や掃除ボランティアなど体を動かしながら心も癒やしていくことが有効であると感じた。避難者の方々も何かをして役に立ちたいとか協力したいという考えをもっている方が多かった。



写真「ラジオ体操をリードするスタッフ」

○19日インフルエンザが発生し、個室に移した。その後も患者は増えていき環境衛生に注意するようになった。

13日から富山県の保健師が日赤派遣で山下中に泊まり込んでいたので大変助けられた。また、自衛官の医師が巡回で避難所を訪問しインフルエンザ対策を指導した。町の支援物資集積場所の体育文化センターへ行き消毒液などもらってきてトイレや入口に置いて環境衛生に努めた。

また18日には山下小学校の校庭に自衛隊の診療所ができたことも助かった。職員にも高血圧やかぜなど体調を崩して帰宅するものも出てきたのもこの頃である。19日には小学校の校庭に自衛隊の仮設浴場ができ、久しぶりに入浴ができた。

教訓；インフルエンザなど伝染性の強い病気は疑わしいものも含めて相談室や保健室、生徒会室も含め一般の避難者とは別の部屋にすることが大切である。手洗いと消毒、マスクの配布などできる限りの手を打つ必要がある。自衛隊の診療所は、無料で利用でき薬ももらえるので大変ありがたかった。

写真
「多目的
ホール、
避難所
の様子」



写真「食事の配給を待つ行列と受付」



写真
「避難者
への配
布物入
れ」



○21日に学校の電話が通じるようになった。りんごラジオ(山元町FM)ができ町の情報が直接被災者に入るようになった。ガソリンは大行列で並んでやっと買えるという状態であった。

23日9:00生徒149名(177名中)が出席し終業式を行った。13:00職員異動内示、15:00公立高校合格発表、そして待望の水がきたのは23日の17:00であった。

教訓；学校としての業務は、予定通り実施する必要があり、3年生の進路事務や職員の移動も重なり多忙であった。

避難所の運営は、手の空いている職員で行うなど、係分担はできているが、臨機応変の対応が必要だった。あわせて、避難所を訪問するタレントさんや炊き出し支援の対応なども嬉しい忙しさであった。

○電気と水がくるようになるとよりよい生活を求めるようになる。お湯を沸かしお茶を飲んだり、洗濯をするようになる。洗濯機をかき集め、ロープを張って物干しを作り順番を決め自分たちで運営する仕組みができていった。また、電子レンジや衛星電話も設置された。こうしてカップ麺を配布することもできた。配布物も、お菓子、タオル、バスタオル、歯ブラシ、ホッカイロ、マスクなど多様化していった。

写真「食器洗いのボランティアの方々」
(後に、話し合いで食器は自分で洗うことになる)



写真「自警団や、ペットと暮らすテント」



4 まとめ

東日本大震災から2週間が過ぎ、電気も電話も通じ、水道も使えるようになった。

この2週間の取り組みがどうであったかで、このあとの避難所生活が決まると言っても過言ではなかった。職員は多忙を極めたが、避難者の方々も食事をもらってはただごろ寝をして過ごしていたわけではない。「避難者は、体を動かし、みんなの役に立つことで心身ともに癒やされていった。」と感じている。それは、係を募集すると必ず集まってくれたからである。避難所を運営するのは、学校の職員として当然のことであり、また、役場職員に対してよりも苦情は少ないと感じた。「学校だから」ということで、避難者の気ままも押さえられていたと思う。学校が避難所となることの利点はこれ以外にもあると考えている。同じものを食べ、同じように床にごろ寝して避難所の運営をすることが、「共に生きていく」という気持ちを作っていたのではないだろうか。

「自分たちに手で避難所を運営する」ことで、4月19日に、武道場と小学校の体育館に、引っ越すことになり、「避難者の場所決め」を自分たちで行った。役場職員や教職員が行うと必ず苦情が出たり不満が広がる。スムーズに移動できたことは自治の大きな成果である。

4月25日に始業式があり、入学式も行われた。

教室を開けるとき避難者は、きれいに教室を清掃し「黑板にありがとうのメッセージ」を残してくれた部屋もあった。学校に避難生活していた生徒も、学校が始まってからも、元気で屈託がなく、いつも明るかったのが印象に残っている。心の奥底は様々な思いが渦巻いていたと思うが、生徒の元気な姿に励まされたと感じている。

自衛隊の皆さんをはじめ、全国各地からのご支援に「感謝する気持ち」を忘れないことを生徒には話している。もらうことに慣れ心が荒れてしまわないように努めていくつもりである。

写真「おにぎりボランティアの皆さん」



写真「自衛隊と合同演奏する吹奏楽部」



写真「物資搬入を手伝う被災者と生徒」



写真「山下小学校の体育館に移動した避難者」



写真「掲示した部屋ごとの名簿；移動がある」

